【ならば闇を、されど光を】

作・藤田ヒロシ

一人芝居版

●キャスト

老婆……仮死薬を持ち、女の前に現れる。

女……仮死薬により死の世界へ向かう

少女……かつて女を愛し、女に愛された者。

人間一度しか死ぬことはできない。

ウィリアム・シェイクスピア

テーブルとイス。蝋燭の揺れる灯りに椅子に座っている「老婆」が浮かび上がる。

老婆　錬金術って知っているだろ？嗚呼、そうさ。ナンでもカンでも混ぜ込んでありふれた物から金を作りだそうっていう愚かな行いさ。欲に毒され出来もしない事に時間と情熱を注ぎ込み、悩み苦しみ……滑稽だろ？

と、小瓶を取り出す。

老婆　「ロミオとジュリエット」って物語知っているだろ？嗚呼、そうさ。傷心と孤独ゆえの若い男女の純真を利用して争い続く街に平穏を取り戻した愚かな物語さ。愛は最も美しい。だから色でも形でも現わせない。もちろん言葉でもね。だからだろうね、安易にすがり付く……滑稽だろ？

わからないのかい？傷を癒したければ包帯を、涙を拭いたければハンカチを、争いを止めたければ慈悲を。愛、それだけは利用してはいけない。純粋な物ほど儚く脆く、欲に毒され、おかしな結末を生み出す。愛はただそれでしかないんだよ。都合のいい結末など求めては……。

と、小瓶を強く握り締める。

老婆　嗚呼、話が少し逸れてしまったね。その滑稽な物語の中でジュリエットっていう小娘が飲むだろ？一時死ぬ為の薬、仮死薬をさ。あれは錬金術が生み出した副産物でね、そいつがコレさ。

と、小瓶をテーブルに置く。

老婆　いや違うね。「仮死薬」って言っただろ？「一時死ぬ為」と。ただ眠るだけの薬とは全く異なる代物さ。仮の住処って言っても、雨をしのぎ、寒さをしのぎ、今夜そこで眠る事に変わりはない。住処は住処。これだって同じさ。仮の死って言ったって死は死、そういうことだよ。

間

老婆　まぁ、疑うのも無理はない話さ。だけどね、試せばわかるってもんだよ。瓶の蓋を開けて一滴、その口に含めばいい。簡単なことだろ？そして、一度試せばたちまち虜さ。嗚呼、あの小娘もその死の味が忘れられなくて、あの世に戻ったのかも知れないね。それを悲恋の物語などと……滑稽だろ？

女

蝋燭の灯りが消える。

女がテーブルに伏せて眠り、そこから覚める。

見覚えのあるような、ないような。夢であるような、ないような。酷くぼんやりとした印象でしかないのに、その声はハッキリと耳に残って……何よりコレだ。

と、小瓶を見つめる。

女

物がある以上、否定はできない。私はあの老婆に会ったのだ。そしてこれを手渡された。なぜ？どうして？理由はわからない。私がこれを使いもせず、捨てもせず、持っている理由も含めて。老婆の言った事が本当で、これが仮死薬だとして、一度死んで生き返る。その体験に何の意味があるというのか？私に何の意味があるというのか？死に憧れる程に若くはない。生きる事に理由が欲しい程に若くもない。この私に一体……。

椅子から立ち上がり、

女

と、ここまで考えて気がついた。年齢は関係ない。憧れや理由など始めから持ってなどいなかった。それなりの時間を費やしたのだから、今はなくとも過去には持っていたはず、と思い込んでいたに過ぎない。それだけのことなのだ。

辺りを歩きはじめる。

女

なのにどうして？説明は出来ないが気になるのだ。そう！気になる！意味も理由もわからない、関係ない。そんな理屈の外側で……外？上？右？左？……そんなことはどうだっていい事。ただの言い方。重要なのは「気になる」という言葉が今の私のこの状況を最も的確に表せていると言うことであり、この「気になる」という状況の収め方だ。嗚呼、もしかしたら他にもっと的確な言葉が存在しているかも知れない！だけれど残念な事に私はそれを知らない。だから私が知る限りでは―。残念？残念な事？自分の此処（胸を押さえる）にあるモノを現す言葉、知りうる全ての言葉から選んだ。なのに残念？それ以上があるとも限らなのに残念？もしかしてそれは「気になる」では表しきれていない何かが此処にあるのだという証左で、私はそれを理屈の外側で……外？上？右？左？……そんなことはどうだっていい事って言ったでしょ！！「表しきれていない何か」私は無意識に認めているという事か……気になる。

と、椅子に座り小瓶を見つめる。

老婆が椅子に座っている。

老婆　それは衝動。突き動かされることでしかその先は知り得ない。嗚呼、そうさ。理由を欲するなど……滑稽だろ？

小瓶に触れ

老婆　死の美しさは愛にも勝るとも劣らない。恋い焦がれ、憧れ続けたその味を知れると知った時、この胸の高鳴りは！嗚呼、今思い出しただけでも、張裂けそうだよ！嗚呼、思い出しただけでも、手が震え出すよ！ほら、手が……震え出すよ……震えが……震えが止まらないよ！震えが！（興奮し）お前は知りたいと思っているはずだよ。あの世とこの世。何が二つを分かつのか？嗚呼、そうさ。行ってみればわかるってもんだよ。さあ、何を迷っているんだい？そんな必要がどこにあると言うんだい？愛と死。美しく儚き憧れ。それによりお前の人生は完成される。そうだろ？瓶の蓋を開けて一滴、その口に含めばいい。簡単なことじゃないか。

と、小瓶を掲げる。

小瓶を持ち、椅子から立ち上がる女。その中身を一滴口に含む女。

しばらくはただ立ち尽くすが、突然に力が抜け、椅子に倒れる様に座り、上体をテーブルに預ける。

上体を起こす女。

女　見覚えのあるような、ないような。夢であるような、ないよう―違う。この椅子、この机、この部屋、この空気さえ、同じようでいて違う。説明は出来ないが違う。何もかもが酷くぼんやりと、それでいてハッキリと感じる。違うのだと。あの世とこの世。その境。私はそれを―

興奮し言葉が途切れる。口を両手で多い、その手震え出す。

女　嗚呼、この胸の高鳴りは！あの世とこの世。その境。私は―

気配を感じ、言葉が途切れる。そして勢いよく振り返り、

女　誰？……あなたは―

老婆　なあ女。覚えていないのかい？お前はその子に会いたかったのだろ？それが叶わないと知ったからだろ？その願いも、その理由も、その子の存在さえも忘れた。そういう事にしたんだろ？……滑稽な話だろ？

振り返り顔を見せる少女

少女　その顔、忘れているのね。悲しい。でも少しよ。ほんの少し。だってそうでしょ？アナタが忘れている。わかっていたこと。嗚呼、謝る事ではないわ。アナタにはアナタの事情があって忘れたのだから。意味のないことなどないのだから。嗚呼、悲しい。それはそうよ。ワタシにはワタシの事情があるのだから。二人は永遠を誓ったのよ。何があっても、何が起きても。例え太陽に背を向け、月にさえ照らされなくとも、アナタとワタシは……悲しいわ。

と、手で顔を覆い伏せる

女　少女が泣いていた。それを見た私は悲しい、苦しい。そう感じたのだ。それは単に涙を流す者に誰もが抱いてしまう同情または戸惑い……。

辺りを歩きはじめる。

女　なのにどうして？説明は出来ないが気になるのだ。そう！気になる！意味も理由もわからない、関係ない。そんな理屈の外側で……外？上？右？左？……そんなことはどうだっていい事。ただの言い方。重要なのは「気になる」という言葉が今の私のこの状況を最も的確に表せていると言うことであり、この「気になる」という状況の収め方だ。嗚呼、もしかしたら……。

と、立ち止まる。

ゆっくりと歩みを進める少女。

少女　ねぇ、覚えている？あっ。嫌みではないのよ。アナタが綺麗に忘れ

てしまう程の久しぶりなのよ。ワタシの此処（胸を押さえる）にあるモノを伝えたい。でもどう始めればいいのか？戸惑って当然でしょ？流れた時間、離れた距離を埋めるキッカケが欲しいの。

しばらく黙って、歩き続ける。やがて足を止め、

少女　（語気を強め）ねぇ、覚えてないの！？「忘れたかった！」その気持ちはわかるよ。そして「忘れた」にした。それもわかるわ！だからって「無かった」になる。それだけは、それだけは！二人は永遠を誓ったのよ。何があっても、何が起きても。例え太陽に背を向け、月にさえ照らされなくとも、アナタとワタシは……果たされなかったその誓い。（胸を押さえる）あるでしょ？（頭を押さえ）あるでしょ？美しい言葉、この身を熱くする言葉はもう待ってはいないわ。恨み、妬み、罵詈雑言。どんなに切れ味鋭いナイフよりもアナタのそれはこの身に深い傷を与える。それでいいの。二人は互いの最も美しいモノに触れ合った。その証としての傷。ならば痛みは喜び。裏切り者だと、卑劣な者だと、罵って！それがアナタの真実だもの！そうしてくれたなら、ワタシは自らの愚かな行いに許しを乞えるわ。嗚呼、許して頂戴。アナタの真実に背を向けた愚者のこの私を！

静寂

少女　罵倒も許しも何も持っていないのね。それなら、ねぇ、どうして来たの？……悲しいわ。

と、手で顔を覆い伏せる。

女　少女がまた泣いた。それを見た私は悲しい、苦しい。そう感じたのだ。それは一度目以上の強さと深さで私を支配する。それなのに、どうして？私は言葉を発せないでただ少女を見つめるしか出来ない。それが一層の強さと深さで私を縛り付け―

突然に言葉を止める。

ゆっくり歩く老婆。

老婆　なあ女。覚えているだろ？お前はその子に会いたかったのだから。此処までは何かにすがってもやってはいられる。だけどね、この先はそうはいかないよ。だからと言って、このまま戻ろうなんて……嗚呼、そうさ。瓶の蓋を開けてひと片、その閉じた記憶を摘めばい

い。簡単なことじゃないか。

始めはゆっくり、次第に苛立ちを見せながら歩く女。やがて足を止め、手で顔を覆い伏せる。

静寂

顔を上げ、少女のように凛と気高く、

女　私の顔は闇の仮面が隠してくれる。でも、なければこの頬は戸惑いと恥ずかしさ真っ赤に染まっているはず。世の常の通りに全ては嘘だと言ってしまいたい気持ちは山々。だけれど、体裁なんて私は嫌！愛して下さる？本当に？アナタの言葉その誓いだけを信じるわ。私、きっとなってみせるわ、欲まみれの清さ、歪んだ正しさ、模造の美しさに囚われた女より、もっともっと真実のある女に。

と、胸に手を当て誓う。その手が震え出し、

女　清く正しく美しく。そうありたくないなんて一体誰が望むというの？でも一体誰がそうあれると言うの？欲まみれの清さ、歪んだ正しさ、模造の美しさに囚われ、最も美しきモノを汚した私が恋い焦がれ、憧れ続けた。もうそこまで。きっとそこまで近づいていた。自身を恨み、蔑み、忌まわしき存在だと悟った私が目指すべき場所。嘘が、真実が、私が、誰にも悟られない一層の深い闇。あと少しの、絶望。あと少し……そう思った時、そこにアナタが！アナタが！いた！嗚呼、そうよ。アナタは教えてくれた。理屈でも選択でもなく衝動。私の真実に従うことこそが、私のあるべき姿。それこそが、私の清く正しく美しく、なのだと。

そして二人は永遠を誓った。何があっても、何が起きても。例え太陽に背を向け、月にさえ照らされなくとも、アナタとワタシは……二人きり。それ以上もそれ以下もない、それが全て！愛していた。この髪、この胸、この唇。私の真実が、その髪、その胸、その唇。アナタの真実を愛していた。必要としていた。違う！そう違うわ！必要としてしまったの！アナタの存在が！無数の傷と無数の溜息。幾千の夜を重ね築き上げてきたモノを、一瞬にして壊した！もうアナタしか残っていなかった。それなに！出逢わなければ辿り着いた！それなのに！私の真実を露わにした！それなのに！最も美しい物がこの私にもあると気付かせた！それなのに！

言ったのよ。「『死にたい』と求めた時、今度は殺してくれる？」　言

ったのよ。「もちろんよ。一緒に行こう」　言ったのよ。「約束よ」
言ったのよ。「その日まで一緒に生きよう」　言ったのよ！その日まで……その日まで！！

動きが止まる。

女　いっしょに……生きよう……それなのに……。

少女　一緒に闘おう。その言葉嬉しかったわ。本当よ。

女　なら、なぜ？

少女　想いは想い。どれほど強かろうと例え永遠だろうと、現実に抗う術にはならない。それでは金は作りだせないわ。

女　それでも、だからと言って！最後のその日まで―

少女　奇跡か、それとも死か。ただ待つだけの日々なんて―

女　それでも、だからと言って！自分から終わりにするなんて―

少女　見せられなかった！死に怯える姿。させたくなかった！「大丈夫だよ」という嘘と作り笑顔。

女　それでも、だからと言って！ひとりで逝くなんて！ねぇ、なぜ、私を置き去りしたの？

と、一歩踏み出す。

少女　ダメよ！それ以上はダメ。戻れなくなるわ。

女　それでいいわ―

少女　ダメよ！死が美しいのはその命を生き抜いたからこそ。アナタには悔いて欲しくはないわ。此処は永遠なの。終わりは来ないの。

女　……。

少女　自分が死ぬと知り、始めて知った。アナタを「殺す事は出来ない」だって愛しているから。

倒れる様に椅子に座る女。まるで眠る様にテーブルに倒れる。

ゆっくりと上体を起こす女。

女　……私は殺せるわ。だって愛しているから。それは精一杯の強がり。

一度剥き出しなった真実を隠せるはずもなく……恨んでなどいるはずもなく、憎んでなどいるはずもなく。ただ寂しかった。ただ抱き締めたかった。ただ抱きしめて欲しかった。私は泣いた。ただただ子供のように……彼女もまた……。

アナタが認めてくれた私の清く正しく美しく。ひとり生き抜くことが怖かった。その恐れを認めてしまう事がアナタ、その愛への背信ではないのかと怖かった。嘘が、真実が、私が、誰にも悟られない一層の深い闇。もう一度そこを目指すことで安らぎを求めようとした……嗚呼そうね滑稽ね。アナタが愛した人だもの、信じてもいいのにね。

テーブルの小瓶を手にして、

また会いに行っても？生き抜く為に。

と、小瓶を強く握りしめる。

女

蝋燭の揺れる灯りに椅子に座っている「老婆」が浮かび上がる。

老婆

錬金術って知っているだろ？嗚呼、そうさ。ナンでもカンでも混ぜ込んでありふれた物から金を作りだそうっていう愚かな行いさ。欲に毒され出来もしない事に時間と情熱を注ぎ込み、悩み苦しみ……滑稽だろ？

いや違うね。「滑稽だろ？」って言っただろ？おかしな話だろ？と。「無意味」だとか「無駄」だどか、そんなこと一言も言ってはいないよ。例え滑稽だろうと、愚かだろうと、信じ込む力っていうのは時に、おかしな物を生み出す事があって……嗚呼そうさ。滑稽だろ？

FIN

無断での使用・転用・転載禁止